

様式第 2 号

視察研修先	北海道富良野市議会	氏名	安孫子 義 徳
視察研修項目	ふらの版 DMO による地域密着型観光の推進について		

観光振興とふらの版 DMO の取り組みについて

DMO とは、観光物件、自然、食、芸術、芸能、風習、風俗など当該地域にある観光資源に精通し、地域と協同して観光地域作りを行う法人のことをいい（地域をプロモーションし、知ってもらい、来てもらう）対象エリアの広さに応じて、「広域連携 DMO（複数都道府県にまたがる区域）」、「地域連携 DMO（複数の地方公共団体にまたがる区域）」、「地域 DMO（基礎自治体である単独の市町村の区域）」の 3 区分に分ける。

富良野においては、広域連携 DMO×市町村×ふらの版 DMC の役割分担（DMC とは、来てくださる人に対して、実際の手配や体験を提供する）としては、富良野・美瑛を知らない旅行者への認知、1. インバウンドの新規開拓 2. 富良野・美瑛のイメージ発信ブランディング 3. 単独市町村では解決できない共通の課題を共通として認知度を上げる取り組みをしている。

また、動機付けとしては 1. 訪れた旅行者の快適な環境・区間整備 2. 中小企業・イベントの立ち上げ支援 3. 民間事業の側面支援 4. 規制緩和などである。

行動への転機として、ふらの観光協会（または商工会議所）において、ホテル・レストラン・二次交通を集約した情報発信、団体旅行・修学旅行への営業活動、インフォメーションの運営などを集約し、ふらの版 DMC（富良野物産観光公社）によって着地型コンテンツの予約・販売を行っている。

寒河江市においては（一社）寒河江市観光物産協会の地域 DMO であるが、一地域の DMO による取り組みだけでは限界があると思われ、他地域の DMO や広域 DMO、自治体などとの連携を強める必要があると思われる。

様式第2号

視察研修先	北海道富良野市議会	氏名	安孫子 義 徳
視察研修項目	民間を主軸にした官民協働による複合的中心市街地活性化事業について		
<p>複合的中心市街地活性化について</p> <p>病院移転にともない中心商店街の衰退・にぎわいの喪失を打開すべく、まちづくり会社を設立、「まちの顔であるべき中心市街地が元気にならなければ未来が開けない！」ということから、中活事業の促進母体とし商工会議所役員で経営責任を持つ体制をつくり、商工会議所会員を中心に64の企業・団体・個人が出資し（市には増資を求めず）民間を主軸に、病院跡地に「フラノ・マルシェ」を整備、富良野の食材や加工食品の販売、飲食店やフリーマーケット等のイベント等の多目的広場を整備。フラノ・マルシェによる波及効果は入場者数、売上高も順調に推移。</p> <p>フラノ・マルシェの波及効果。建設投資は、3.7億円→5.9億円 1.59倍 消費効果は、売上金、5億円→9.5億円 原材料波及効果 1.57倍 所得波及効果 0.37倍 合計 1.94倍 雇用効果 マルシェ及び関連雇用 98名</p> <p>ブランドイメージの高い富良野の食材（野菜等）や加工食品（乳製品）の販売、飲食等の店舗やフリーマーケットを実施し街中の賑わいを促進・創出する。</p> <p>本市中心商店街はフローラ・SAGAEを核にしているものであるが、神輿会館前の広場等を利用し、チェリーマルシェ以外のイベント等を増やし中心街の活性化・交流人口の増加を望むものである。まちづくりは、指定管理や第三セクターに頼るものではなくまちづくり会社が複合的施設のオーナーになり、リーシング（貸借やリース）収入や売上マージン収入などで収益を上げながら中心市街地活性化に向け行政との協働により行っていくべきものと思います。</p>			

様式第 2 号

視察研修先	北海道上川郡美瑛町議会	氏名	安孫子 義 徳
視察研修項目	廃校を活かした取り組みについて		
<p>美瑛町における学校の歴史と統廃合では、明治に入植開拓が始まり学校教育では、明治 27 年に簡易教育所、明治 32 年に美瑛尋常小学校（現：美瑛小学校）へとつながる。</p> <p>広大な面積を有する美瑛町の各地域に学校がそろうまでは 21 年もの歳月を要したものである。</p> <p>昭和 46 年にはピークとなり、小学校 13 校、併置校 7 校、中学校 4 校となるが、現在、総人口の減少とともに、児童・生徒数の減少により閉校・統合が始まり、小学校 5 校、中学校 2 校になり、廃校の有効活用が問題となる。</p> <p>どこの自治体、地域においても小中学校は、単に教育施設としてだけではなく、地域コミュニティの中核施設としての役割を担う貴重な公共的財産であり廃校はそこに住む子育て世代の転出また地域コミュニティの衰退など弊害を生み、出来る限り有効活用していかなければいけないと思います。</p> <p>閉校になった既存施設の有効活用をするのは、地域活性化を図る一手段として重要になるものではないでしょうか。</p> <p>既存施設を活かすことで初期費用も抑えられ、新たなビジネスなども生み出す可能性があると思います。</p> <p>本市においては、平成 25 年に田代小学校が閉校となりましたが、学びの里 TASSHO（たっしょ）として利用活用しています。リノベーションして里山での暮らしを体験しながら、宿泊できる施設です。ここは NPO 法人としての活動になっていますが、この後、本市においても、人口減少・児童数減少にともない閉校、廃校問題が浮上してくると思われれます。</p> <p>そのような事態をふまえ本市においても、いろいろな施設利用法を今の段階から考えていく必要があるのではないのでしょうか。</p> <p>オフィス・宿泊施設・工場・IT 施設など、また公共施設の役割りを残しつつ地域のコミュニティの場としての施設として活用していくことも考えられます。</p> <p>『思い出のたくさんつまった校舎を残す』違った形で活用していくべきと思います。</p>			

様式第 2 号

視察研修先	北海道千歳市議会	氏名	安孫子 義 徳
視察研修項目	千歳市防災学習交流施設「そなえーる」について		
<p>千歳市防災学習施設そなえーるは、市民（自主防災組織）、ボランティア、防災関係機関が単独又は相互に連携し、防災学習や防災訓練等を実施することで、市民や防災関係機関の防災力を高めるとともに、防災関係機関に対する理解を深めることを目的とし、災害時には、災害対策の拠点として使用するもので、A・B・Cのゾーンからなっています。</p> <p>Aゾーンは3階建ての防災学習交流施設「そなえーる」をはじめ、防災訓練広場、ロープ訓練塔、防災備蓄倉庫を兼ねた副訓練塔、常設ヘリポート、駐車場を完備し、災害を「学ぶ」「体験する」「備える」をテーマに災害の疑似体験や防災学習を通じて、防災意識を高める目的に起震装置、煙非難装置、予防実験装置、避難器具などを備えた施設です。</p> <p>Bゾーンは、「学びの広場」とし、雨水調整池、消火体験や救出体験を通し、自助・共助学ぶ広場になっています。</p> <p>Cゾーンは「防災の森」は150人が利用できる「野営生活訓練広場」「多目的広場」や湧水を利用した「河川災害訓練広場」、「土のう訓練広場」さらにアスレチック遊具、「サバイバル訓練体験」など共同作業が体験できる広場になっている施設です。</p> <p>本市には、常設の防災センターはありませんが、年に一度ほどの防災訓練等で防災意識を高めているものであります。山形においては、山形県防災学習館（三川町）また山形市市民防災センターなどがありますが、千歳市のような大規模施設ではありません。私も消防団に所属していた時に三川町の防災学習館にて地震体験や消火器による消火訓練などを経験してきましたが、千歳市の防災学習センターの「防災の森」のサバイバル、キャンプのできる施設は、災害にあって自宅から離れなければいけなくなった時のために野営生活を体験できる施設は大変参考になりました。</p> <p>災害が無いことが一番いいことですが、災害に備え、いざという時の心の備え、食料・飲料の備蓄、避難場所や避難経路など常の準備が必要だと思います。</p>			